

種々の時間の關係に就いて

上田大助

一

從來動もすれば物理的時間が唯一の時間（或は時間性）なるかに考へられて居た。ニウトンの時間論、カントの「純理批判」中「先驗的感性論」に於ける時間論等が之れである。今日の新カント派殊にマールブルク派の考へる所も多く之れである。

然るに近代に於ては物理學的時間以外種々なる時間が考察せらるゝに至つて居る。フツセルの現象學的時間、ベルグソンの實時、ポアンカレの心理的時間、ジンメルの歴史的時間等々の如きが之れである。物理學的時間に就いても今日は相對性理論が一つの革命を齎して居るのである。今此等種々なる時間の間の關係を、カント派などの如

く、吾人に直接確實なる經驗に立脚して認識論に於て構成主義を取る立場から考察して見度いと思ふ。茲に直接確實なる經驗と言ふのは極めて廣き意味に於て言ふのであつて、合理論との對立に於て考へられる感覺論或は心理主義等の如きものを意味するのではない。又自然界に關する事のみでもない。諸種の科學上の諸事實、道德宗教藝術等の諸事實等皆吾人の直接經驗する所たるを失はないのである。従つて吾人は彼の所謂先驗的要素なるものをも猶經驗的事實の内に見出さんと思ふのである（フツセルが「本質」を内在的に見出すが如く）。田邊博士の時間論（哲學研究第十七號）もかゝる立場からなされたものではないかと思はれるのである。

る。

攻究の始めに先づ其の方法論的基礎を定むることが必要であるが、右のカント的構成主義の立場に於ては總て經驗を種々なる要素(質料、形式、意識等の諸要素)に分ち、具體的なる(經驗科學等)を此等の要素の種々なる結合構成として説明理解せんとするのであるから、かゝる立場に於ては經驗の種類内容に就いて理論上元素的なるものと合成的なるもの、基礎的なるものと派生的なるもの、一次的なるものと二次的なるもの、直接なるものと間接なるものとを區別することとなるのは當然である。従つて時間論の問題に於ても基礎的なるものと派生的合成的なるもの、直接なるものと間接なるもの等の區別を明かにし、前者に就いては其の本質を適確明瞭に觀察把握し後者に就いては其の構成の手續を明瞭ならしめることが要求せられるのである。而して他方、經驗を發生的或は發

達史的に考察すれば明かに原始的經驗は(それが原始人の經驗であれ、吾人文化人の素朴的意識状態であれ)より單純であるから、其はより多く基礎的なる要素から成立つて居ると言はなければならぬ。高級進歩せる經驗は原始的經驗に更に種々なる要素(殊に諸種の形式)の附加(或は參加)することによつて成立するのである。従つて此意味から言へば同一類或は同一方面のものに就いては發生上原始的なるものは理論上(構成の理論上)基礎的なるものであると言ふことが出来るであらう。今日の認識論的研究に發生的或は發達史的研究の應用せられるのは(例へばマツハ・ポアンカレ^①等の科學的批判)これによることと思ふ。従つて時間論の攻究にも亦之れを發生的發達史的に見ることが甚だ大切否寧ろ必要であると思はれるのである。

却説、然らば種々なる時間の經驗に於て如何な

るものがより、基礎的より、原始的であつて、如何なるものが派生的合成的乃至は變容的であるか。時間に關する經驗に於ても吾人は經驗一般に於けると同じく直觀的要素と思惟的要素との二を區別し得るのであるが、前者がより、基礎的より、原始的であつて、後者が二次的であることは特に言ふ迄も無い事であらうと思ふ。又後者に就いても單に原始分割をなすに止まるが如き思惟はより、原始的であつて、數理の如き思惟は甚だ高級發達せるもの

と言はなければならぬ。此觀點から吾人は種々なる時間をより、基礎的より、原始的なるものより次第により、合成的より、高級派生的なるものへの段階的序列に配列することが出来ることとなる。フッセルの現象學的時間の如く直接なる體驗に伴ふ直觀的時間の如きはより、基礎的より、原始的なるものであり、物理學的時間殊に今日の相對性理論の時間の如く極めて高級なる思惟を伴ふものは極めて高

級派生的なる時間である。此等二種の時間の間にも種々なる時間が配列せられる。以下吾人は最も基礎的原始的なるものより順次に主要なる時間に就いて考察を進めて行き度いと思ふ。前記田邊博士の時間論はフッセルの現象學的時間を基礎として心理的時間物理的時間數學的時間等を考察して居るのであるが、吾人は更に一層基礎的なる時間を認め、又特に本論文の所謂「形而上學」的時間及歴史的時間に就いて考察せんと欲するのである。心理的時間に就いても全く異なる方面より觀察せんとするのである。

註① E. Mach, Erkenntnis und Irrtum.

② H. Poincaré, La science et l'Hypothèse.

③ E. Husserl, Ideen, S. 81. S. 141 u. S. 143.

二

先づ最も基礎的原始的なる時間とは如何なるものであらうか。そは定義によつて最も原始素朴的

なる經驗(人或は意識)に於て經驗せられる時間である。吾人は從來未だかゝる時間として觀察せるものあるを聞かないのであるが、吾人が以て其の本質を一とする心理的時間(後述)に就いては既に多くの心理學者其他によつて充分なる觀察が施されてゐるのである。フツセルの現象學的時間及ベルグソンの實時等も本質に於ては基礎的原始的時間たる可きものと思はれるのである。今吾人が、此等の人々が此等の時間に就いてなせる如く、直接なる觀察によつて得たる結果を述べれば次の如くなる。而して又發生的攻究の結果も亦之れと一致するのである。(一)最原始的なる時間(以下之れを「眞の時間」と名づくることとする)は純粹なる「持續」(Duration)である。従つて其は亦「連續」(continuity)である。これが最も原始的なる經驗に於ても經驗せられ得る時間であつて、思惟の發生以前最も直接に經驗せられる時間である。之れが

時間性の根源であつて、他の總ての時間は之れから時間性の概念を借り來るのである。ベルグソン等が時間の本性として極力主張しつゝある所も亦此點であると思ふ。彼の(變容されて)殆ど全く空間化したされる物理學的時間の如きも其の時間概念は此持續から借り來つて居るのである。思惟の巧妙なる加工或は變容も此原始的なる時間の概念(即ち持續性)を見失はざる範圍に於てのみ時間構成として意味を有するのである。若し之れを失ふならば其は最早時間では無く單なる思惟或は數理と化したるのである。コヘンが時間を「多樣性の判斷」として論ずるが如きはかゝる傾向の一例と見る可きであらう。(フォルケルトも流動持續を以て時間の本性とする立場からナトルプの時間論が時間を數と同一視することを非難してゐる。氏は又カントが算術を時間の先天的科學なるかの如くならしめてゐることに對しても同様に非難する。①②③)

(二) 思惟發現の以前であつて未だ數量と言ふことが無いのであるから、其は全然質的である。従つて勿論測定し得べきもので無く、唯直接端的に直観さるゝのみのものである。連続と言ふも質的直観的の連続であつて(ニウトン等の如き)數學的連続ではない。(三) 是は直観の形式である。新カント派などの如く時間を範疇或は「思惟の形式」とするのは本源的なる眞の時間性に就いて考ふるものでは無く、思惟によつて加工された時間、否寧ろ其の加工の一方面をのみ考ふるものと言ふ可きであらうと思ふ。カントに於ては勿論未だ本源的時間と派生的加工時間との區別が無く、従つて其の「感性論」に於て「直観の形式」と呼ばるゝ時間が既に思惟の加工を経たる數量的なるものとなつてゐるのであるが、新カント派は其の直観の方面を捨て、唯其の思惟の方面をのみ考究しつゝあるものではなからうかと考へられるのである。(四) 次

に最原始的なる時間は一つの質的なる連続であるから、それは常に「現在」であり、従つて或る意味に於ては常に「同時」である。(心理的時間に就いては既にポアンカレ^④、フォルクケルト等の如き人が此同時を指摘してゐるのである。)茲に此同時は考へられたる同時、物理學的時間の同時とは全く意味を異にするものであることは特に言ふ迄も無いことであらう。最素朴人の經驗する所は常に現在のみであつて、過去も未來も經驗することは無い。常に現在あるのみである。進歩したる認識論的意識も吾人の眞に知り得るは唯現在のみであつて、過去及未來は唯「現在」に於て考へられたる一つの或者に過ぎずとなす。(佛教には過去無體説があり、心理學では例へばウ・ジェームスは「過去の時間の感じは現在の感じである」と言ひ、元良勇次郎氏は「過去の出來事は記憶として吾人の心中に存するものにして云々」^⑦或は「記憶心像も未だ畢竟

現在の意識活動なるを失はず「等」と言へるを見る）唯素朴原始人の過去未來を知らず従つて或る意味に於ては現在をも知らざるに對して、進歩したる意識は過去未來を知ることによつて反つて眞の現在を知るのである。勿論時間が持續である以上過去及未來が伴はなければならぬことは言ふ迄も無いことであるが、それが一つの完き質的連續である限り其の過去及未來は其の現在と離れて存在することは出來ず、其の「現在」の内、其の一要素一内容として見出さるゝの外はあり能はぬのである。「現在」の内に過去と言ふ事を経験し、未來と言ふ事を経験するに止まるのであつて、「現在」ならぬ過去或は未來を経験すると言ふが如きことは全く不可能の事に屬する。(かゝる「現在」を心理學的に見たものが心理學の所謂「心的現在」であると思ふ。)(五)最原始的なる時間は有限である。既に持續であり連續である以上それが或る幅或は擴り

を有たなければならぬことは言ふ迄も無いことであらう。心理學に於ける「心的現在」はかゝるものとして認められて居るのである。之れを無限に分割して例へば「ナイフの刃」(ウ・ジェームスの語)の如くすること或は現在をかゝるものと見ることは出來ないのである。(そは唯數學的思惟が左様に考へる迄の事である。)而して其は又他方無限無窮に流るゝものではない。吾人の經驗し得る「現在」或は「同時」には一定の限界がある。流動持續も唯其の「現在」或は「同時」を失はざる範圍の流動である。「心的現在」の幅或は擴りは無限に大なることを得ないことは既に充分認められてゐることである。而して吾人の經驗が無限に連續せずして常に「無」に歸し又「無」より發生し來りつゝあることは吾人の不斷に經驗しつゝある所である。(フォルケルトは時間の有始有終を假定として居るのであるが、吾人は直接端的の事實として之れを認むるの

である。進歩したる意識は之れを経験の中断として思惟するけれども、原始素朴人は之れを思惟せずして唯常に現在を経験するのみである。而して進歩したる意識に於ても其の眞に経験する所は常に「現在」であつて、「時間の無限」或は「経験の中断」はたゞ思惟の構成的所産たるに止まる。「現在」を超えて此等の事を直接に経験するのではないのである(たゞ無限と言ふこと中断と言ふことを「現在」に於て経験するのみなのである)。眞に直接なる経験から言はゞ時間は唯其の経験に於て、唯其の経験と共にのみ見出さるゝのであつて、経験の絶無なる時即ち「無」に於ては時間も何も無いのである。然らざれば眞の「無」ではないのである。(心理學に於ては内容を有たない「空虚なる時間」の概念を排撃する。)之れを経験の中断とするのは経験(現在)の一内容たる時間のみを抽象して之れを経験以外なる「無」の境地に投入思惟するに由るので

あつて、一つの形而上學である。而して其處には必然「空虚なる時間」が考へられることとなる。時間の無始無終は直接的なる経験的事實では無くして、たゞ考へられたものに過ぎないのである。

(吾人は總て(無限)は考へられたものであると考へるのである。フッセルの現象學的時間は直接意識殊に全経験意識の體驗する時間である限り、其の本質に於ては「眞の時間」たることを失はないのであるが、其の不斷の流動と考へられて居る點^⑩に於て未だ眞の原始的なる時間たることを得ず、既に幾分思惟の加工を経たるものと言はなければならぬと思ふ。ベルグソンの「創造的進化」に於ける時間も亦左様であると思ふ。然し本源的なる眞の時間がかく有始有終であり有限であると言ふも、其の有始有終の點、其の有限の點に時間性の本質があるのでは無く、其の純粹持續なる點、經驗(内容)と共に持續流動する點に於て眞の時間性が認

められるのであるから、フッセル及ベルグソンの右の時間は此點に於て眞の時間性の本質を失はざるものと言ふことが出来るとは思ふのである。反之ハンス・ドリーシユは其著「形而上學の可能」に於て意識の中斷、其の不連續を認むると共に、時間^⑩に就いては時點(而も數學的微分的點)を直接の經驗とし、時間の連續的流動は間接であり「理論」^⑪「構成」であると爲して居るのであるが、かくては時間或は經驗の點的性質即ち其の有限性には注意せるものとは言ふ可きも、其の流動持續なる時間の眞性を失ふものとなるであらう。(吾人とは立場を異にするものではあるけれども、フォルケルトも同様にドリーシユの此非連續觀を排撃してゐる。)^⑫構成の手續に於ても本末顛倒であつて、基礎的なるものを反つて構成的のものたらしめて居るのである。又時間の有限性を認め、其の點的性質を認むる場合に於ても、前述の如く必ず或る幅或

は擴りを考へなければならぬのであつて、ドリーシユの如く微分小に考ふることは許されないのである。時間を直線に比する場合に於ても其の直線は直觀的連續の(従つて又或る幅を有する)直線でなければならぬのであつて、ドリーシユの如き數學的直線、無限點の連接なるが如き直線であつてはならないのである。時間をドリーシユの如く考へることは最も多く時間の本性を失ふものであると思はれるのである。(プラトン「タイムイオス」の時間が宇宙の創造と共に發生せるものとせらるゝ點に於ては吾人と同じ立場にあると思はれるのであるが、それが永遠に似せられ無限的とせられる限り形而上學的であつて、眞の經驗的事實を如實に言ひ表はすものではないのである。)

吾人は最も原始的最も基礎的なる時間性に就いて以上の如き諸性質を認め得ると思ふのであるが然し右の如き時間の諸性質は何等特に新しく見出

されたものではないのであつて心理的時間の本性として既に久しく認められて居る所なのである。

唯吾人は之れをまた最根本的な「眞の時間」の性質としても、否寧ろ反つて其は元來「眞の時間」に本有なる性質であるとして考へんと欲するのである。而して之れと質を同うする心理的時間は後に述ぶる如く其の實質に於ては「眞の時間」と同一不二のものであるけれども、幾何かの思惟を伴ふ點に於て之れを最基礎的なものとはせず、一つの派生的者とせんと思ふのである。

註① Cohen, *Logik der reinen Erkenntnis*, S. 144 ff.

② Johannes Volkelt, *Phänomenologie und Metaphysik der Zeit*, S. 121.

③ Volkelt, *op. cit.*, S. 122.

④ ボアンカレー「科學の價值」第二章(邦譯四三頁)。

⑤ Volkelt, *op. cit.*, S. 78.

⑥ W. James, *The principles of psychology*, Vol. 1, p. 627.

⑦ 元良勇次郎氏「心理學概論」二〇五四頁。

⑧ 同上 一〇五五頁。

種々の時間の關係に就いて

- ⑨ Volkelt, *op. cit.* S. 167.
 ⑩ Husserl, *Ideen*, S. 163.
 ⑪ Hans Driesch, *The possibility of metaphysics*, p. 11.
 ⑫ Volkelt, *op. cit.* S. 44.

三

フツセルの現象學的時間も、それが意識の時間であり體驗の流れである限り、^①心理的時間とも稱し得られるであらうと思はるゝのであるが、普通に心理的時間と稱せらるゝものは、心理的意識即ち個人の精神に於て覺知せられる時間を指すもの如く思はれる。ボアンカレーが「科學の價值」^②に於て心理的時間と名づくるものは之れであると思ふ。マッハが「生理的時間」^③と名づくる心理的時間も亦同じ意味のものであらうと思ふ。そは兎に角として吾人は心理的時間をかく定義して、以下此心理的時間に就いて考察を進め度く思ふのである。(勿論心理的時間と言ふ語を物理的時間の如き量的時間と區別するための、質的時間を表すもの

としても用ひ得るであらう。然し之れとて心理的意識の、或は廣く意識の直接に覺知する時間が未だ量的で無く質的であるに職由するのであると思はれるのである。又此處に所謂心理的時間は彼の生理心理學に於て精神物理學的に測定せらるゝ心理學的時間ではない。後者は全然量的なる物理學的時間に外ならぬのである。

却説かゝる心理的時間即ち心理的意識或は個人精神によつて覺知せられる時間は如何なるものであるか。前述の最本源的最基礎的なる「眞の時間」とは如何なる關係に立つものであるか。此問題に答ふるがためには其の心理的意識或は個人精神の如何なるものであるか、また其の全經驗（經驗の全體）或は全經驗の意識（フツセルの現象學的意識の如き）に對する關係等を明かにすることが必要となるのであるが、此處には此等の事に關する細論に深く立入ることを得ず、唯筆者の思索の結果

のみを極めて簡單に叙述するに止まらざるを得ないのである。先づ個人の成立（或は「構成」）に就いて言はゞ、其は種々なる質料的並に形式的要素から身體が構成され（科學的或は形而上學の意味に於て言ふのではなく、認識論の意味に於て言ふのである）、之れに全經驗の意識（フツセルの現象學的意識の如き）を投入して之れに結合せしむるのである。従つて個人の精神は全經驗の意識（即ちフツセルの現象學的意識或は「意識一元論」的意識）と全く同一物である。直接なる經驗に於ては、直接に經驗する者に取つては意識は一あつて二あることを許さないのであつて、「身心平行」（實は一）如）として身體と結合する（或は身體の内に宿る）と考へらるゝ精神或は意識はまた「人法一如」として全經驗（従つて其の意識、其の人の經驗する限りに於ての全實在）と一如に結合してゐるのである。身體と（のみ）結合し、其の内に宿ると考へるのは

一つの「假象」である。意識は空間内に制約せらるゝが如きものではなく、實在(其の經驗し得る限りの)の全體を掩ひ、之れと結合し得るのである。佛教に所謂「大我の自覺」はかくの如きことを言ふのであらうと思ふ。(梵と我とは體的に同一即ち全然同一である。かくてこそ大宇宙〓小宇宙と言ふことも完全に理解し得られることとなる。カントに於ても自然界を構成する形式は其儘悟性概念として個人精神の形式を爲すのである。)従つて此點から言はゞ直接なる意識は唯自己の意識あるのみ、其の經驗(此外に直接なる實在はあり能はぬ)の經驗者の意識(勿論實在と一如的に結合せる意識)あるのみとなり、一種の獨在論が正當なる歸結となる(筆者は、カントの主觀主義は終にかくの如き所に來るべきものではないかと考ふる者の一人である。)(自己の意識を個人的有限的として全實在を掩ふに足らざるものなるかに考ふることは多

くは直接經驗の事實と思惟の構成たる形而上學とを混同するに由るものと思ふ。形而上學に於ては勿論自己以外の、又自己以上の意識が考へられ、従つて又自己の意識する範圍外の實在が考へ得られることは言ふ迄も無いことである。)然らば他の意識或は他人の意識は如何と言ふに、其は直接には存在せず、唯間接に考へられるのみであると云ふの外はない。自己の意識は直接に又如實に意識し體驗し得るのであるが、他の意識は直接には意識し體驗することを得ない。唯自己に等しとして種々に想定せらるゝのみである。此意味から言つて直接的には(或は認識論的には)自己の意識と他人の意識とは質を異にするのである。唯「自己に等し」と言ふこと(思惟、形式)によつて、形而上學的に自己と等しからしめるのである。形而上學的には他人は自己と獨立なる存在である(かゝるものとして考へられる)けれども、認識論的には「移

入」によつて構成せられるのである。先づ自己の存在(或は存立)があり、然る後(二次的に)他人の存在があるのである。勿論自己と言ふ意識は他人との對立によつて始めて可能となるものでもあらう。然し其の他人と言ふこと其自身が既に自己によつて意識せられるのであり、又其の他人の如何なるものなりやの實質内容は自己(自己の實質内容)を待たずしては知り(實は測り或は考へ)得られないのである。吾人は自己の經驗の外は知り能はぬ。他人の經驗は唯然か考へるに止まるのであつて、決して如實に知るのではない。自己の經驗を他人が理解す或は共に經驗すと言ふも唯自己が左様に考へる迄であつて、之れを如實に知ることは出来ないのである。(かく吾人は他人を、フォルケルト、メッサー、ビー・ビー・バウン等々の如く「豫定調和」的に考ふる事なく、飽く迄構成主義的に考へんと欲するのである。)個人の意識を右の如きも

のと考ふれば、其の覺知する時間たる心理的時間は全經驗の意識の覺知する時間たる「眞の時間」と全く同一物であることとなるのは明かである。相似たるもの或は質を同じくするもの等(例へばフォルケルトに於ける心理的時間と超主觀的時間との關係の如き)と言ふ可きもので無く、全く同一物なのである。かく見るならばポアンカレの心理的時間とフッセルの現象學的時間とは畢竟同一物なのである。ベルグソンの「意識の直接與件」(此處に考へられた意識が心理的意識であることは特に言ふ迄もないことであらう。)に於て考へられた「實時」と「創造的進化」に於て考へられた宇宙的時間とは畢竟同一物である(何んとなれば吾人の見によれば「創造的進化」の實在も其の同じ意識によつて經驗意識せられるからである)。唯心理的時間はそれが「心理的」即ち個人精神的として意識せられる限り既に幾分考へられたるものを伴ふことと

なるのである。而して吾人により直接なるものは何れかと言へば、言ふ迄も無く經驗全體に關する意識即ち現象學的の意識であつて、太古最素朴人も既に此意識を有するのである。心理的意識は身體の構成、「内外」の區別の發生を待つて始めて可能となる甚だ高級なる意識である。従つて其は言ふ迄も無く派生的二次的なるものでなければならぬ。然し茲に總て時間の知覺は狀態の變化に由るのであるが、經驗中變化の最も著しく覺知せられるのは個人の心的狀態及其の身體に外ならぬのであるから、時間が通常吾人の個人我に於て特に著しく或は最も著しく感ぜられることは言ふ迄もないことであらう。従つて時間に關する觀察が先づ自己の個人我に就いて行はるゝと言ふことは方法上良きことであり、又或る意味に於ては自然であるとも言ひ得られるであらう。此意味に於て ロック、カント、ベルグソン、ポアンカレ、マッハ等々

種々の時間の關係に就いて

の歩める道は元より當然である。殊に、カントが「感性論」に於て始め時間を「内官の形式」とし、「時間」は外的に直觀し得られず、「時間は外的現象の如何なる限定であることも出來ぬ」等として心理的に考察し乍ら、次第に觀念論的立場に徹底して其の所謂外的現象をも亦等しく心性の内的狀態とすることが出來て、「直接には吾人の内的現象の制約であるが、従つてまた之れによつて間接に外的現象の制約である」として之れを現象學的時間に迄擴大せるが如きは（結果から見て）甚だ當を得たものであらうと思はれるのである（尤もカントが方法論的に充分意識して此事をなしたと言ふのではない。否反つて或る個所に於ては直接に「眞の時間」を現象學的に直觀把握せんとするが如き態度を示してゐるかとも思はれるのである）。時間研究の實際的順序は右の如きが自然或は當然であるとしても、其の理論的順序は之れと反對に「眞

の時間」がより、先きであつて、心理的時間は之れから導き出さるゝものでなければならぬと思はれるのである。而してカントの如き觀念論的立場に於ては理論的に現象學的時間と心理的時間との關係を(上述の如く)定むること及實際的に後者から前者への移り行きが容易に可能となると思はれるのであるが、ベルグソンの如き實在論の立場に於ては(一般に外界對象の認識把握の可能の説明が困難なる如く)此等の事が困難或は不可能となるのではないかとさへ思はれるのである。そは兎に角ベルグソンに於ては「創造的進化」に於ても別に其の宇宙的時間と心理的時間との關係を定めんとすることなく、又「意識の直接與件」に於ては「外界には繼續なし、唯吾人の意識に對して、繼續するものを吾人が之れを其自身繼續するものとなすのである」^⑩として外界の時間を否定し乍ら「創造的進化」に於ては「然し繼續は物質界に於てすら否み難

き事實である」として之れを肯定するが如き矛盾をさへ見るのである。フオルケルト(「時間の現象學及形而上學」)に於ては心理的時間は意識の直接に體驗するものとして絶對的に之れを認めるのであるが、超主觀的なる「自然」に於ては時間^⑪は唯一つの假定として之れを認むるに止まるのである。(フオルケルトは其の心理主義的實在論の立場から一般に外界認識の可能を否定するのである。)

心理學に於ては通常主觀的時間と客觀的時間とを區別するのであるが、然し之れを以て直ちに質的なる心理的時間と量的なる物理的時間との區別となすが如きは大なる誤りである。何故と言ふに、主觀的時間は自己に直接なるものとして元より心理的質的であるが、客觀的時間は必ずしも數量的なる物理的時間のみとは限らず、數量的には測定し得られざる多くの質的時間が又客觀的と見做さ

れ得るからである。次に述べんとする「形而上學」的時間及歴史的時間の如きが之れである。即ち物理的時間は唯一の客觀的時間では無く、客觀的時間の或る一種に過ぎないのである。之れを唯一の客觀的時間なるかに考へるのは恰も物理的時間を唯一の時間性なるかに考へると同じく一つの獨斷(恐らく自然科學的偏見)である。(茲に客觀的時間或は一般に「客觀的」と言ふことは如何にして可能となるかに就いては別に立入らぬこととする。たゞ「客觀的」と言ふことは一つの形式であつて對象或は事物の實質内容、此場合に於ては時間の實質内容には何等の關係を有しないものであることを附言して置き度いと思ふ。)

註① Husserl, *Ideas*, S. 81.

- ② ホアンカレ「科學の價值」第二章一。
- ③ 高橋、木村兩氏著「印度哲學宗教史」第十版三一七頁。
- ④ Volkelt, *Erfahrung und Denken*.
- ⑤ A. Messer, *Einführung in die Erkenntnis Theorie*.

種々の時間の關係に就いて

- ⑥ B. P. Downe, *Metaphysics*.
- ⑦ Volkelt, *Die Phenomenologie u. Metaphysik der Zeit*, S. 149.

- ⑧ Kant, *K. d. r. V.*, von dem Raume § 2, erste Paragraph.
- ⑨ ditto, von der Zeit, S. 6, (b).
- ⑩ ditto, von der Zeit, S. 6, (e).
- ⑪ ditto, § 8, Allgemeine Anmerkung zur transz. Aesthetik.
- ⑫ Bergson, *Time and Free Will*, p. 227.
- ⑬ Volkelt, *op. cit.* S. 163.
- ⑭ Volkelt, *Erfahrung u. Denken*, S. 60, 64, 136, 137 usw.

四

思惟によつて加工せらるゝも未だ量的とはならざる時間がある。此處に考察せんとする「形而上學」的時間及歴史的時間の如きが之れである。此等の時間は上記の心理的時間が思惟の單なる附加によるもの(従つて其の實質に於ては「眞の時間」たることを失はざるもの)とは異り、思惟によつて加工せられるのであるけれども、たゞ質的に加工せられるのみで數量的には加工せられないのであ

る。従つて物理的時間に比すれば遙かに、多く「眞の時間」の係を有するのである。然らば其の所謂「形而上學」的時間とは如何なるものであらうか。此名稱は此處に假りに命名したものであるが、吾人は之れによつて「形而上學」（或は「形而上學的の世界」を可能とする時間を考へんとするのである。然らば其の「形而上學」とは如何なるものであるか。吾人はウォルフ、カント等に從つて宇宙論、自我論、神學等の如きものを「形而上學」と呼ばんと思ふのである。却説然らば此等の「形而上學」に於て古來如何なる時間が考へられてゐるであらうか。先づ宇宙論に於てはバルメニデス、プラトン、アリストテレス等の如く靜的に考へんとするものも、又ヘーラクライトス、ベルグソン等の如く動的に見るものも共に多くは世界を無始無終とする。此等は何れも「現在」の有限性を超えて其の連續性を無限化するのである。而して前者が其の内

容を（全體として）不變的に見んとするに對して、後者は之れを不斷の變化と見ると言ふ相異はあるのであるけれども、時間を無始無終の存續とする點に於ては即ち一である。（尤もプラトンに於ては前に述べたる如く時間を世界創造と共に始まるものとなす所が無いではないけれども、イデヤの世界は無始無終でなければならぬと思はれるのである。）又印度の劫波說或はストア派、オリゲン等は世界の成住滅を認め、一方に於ては一世界の有始有終を考へると共に他方に於ては其の反復循環の無始無終を考へるのである。此等は何れも二重の「形而上化」を行へるものであつて、即ち一方に於ては眞の時間或は經驗の有限性（有始有終）を或る仕方にて形而上化すると共に他方に於ては其の持續の方面を無限に形而上化するものであらうと思はれるのである。而して此等の形而上化は何れもたゞ質的であつて、其無限或は其の或る期間は何

等數量的意味を有するものではないのである——假令數量的なる物理的時間の語を以て表はすとすも。基督教は世界を有始有終とするも其の或る長期間の存續と天國の無終とは之れを認める。此處にも何等數量的なるものを含まない、(千福年説の「千年」等も何等數量的意味を有するものではない)。而して心理的時間を以て「經驗」(具體的なる全經驗の)主觀的方面を抽象するものとするならば、宇宙論に於ける此等の「形而上學」的時間は「經驗」の客觀的對象的方面を抽象せるものと言ふ可きであらう。自我論に於てもアリストテレスの發展説、ライブニッツのモナドロジ、カント、シヨッペンハワー等の不死存續、基督教の來世、佛教の輪廻等々に於ける如く、或は無始無終、或は有始無終、或は無始有終等種々に考へられるのであるけれども、何れも質的であつて數量的ではない。神學に於ては殆ど總て神を無始無終と考へる様で

ある。(有神論の神は主として「經驗」の經驗者即ち自我が形而上化せられたものであり、汎神論の神は主として「經驗」の内容の方面が形而上化せられたものではないかと思はれるのである。)かくの如く「形而上學」的時間は質的であつて、思惟の加工を受くることが最も少く、加工され考へられた時間の中では最も原始的で、眞の時間性に最も近いものである。古代素朴の状態に於て既に早く「形而上學」が考へられたのも誠に當然であると思はれるのである。

(従來の「形而上學」は時間の形而上化がかくの如く區々であり、且其の形而上化の理論的根據をも充分意識しないのであるが、若し其の形而上化が合理的普遍妥當に行はれ得るものとすれば、而して時間以外の事に於ても合理的普遍妥當なる形而上化が可能であるとすれば、其處に合理的なる「形而上學」即ち「學としての形而上學」が

成立し得ることとなるのではないかと考へられるのである。筆者はかゝる「形而上學」の最小限として「經驗」と一如なる自我即ち「人法一如」の自我或は實在の或る種の存続と、かくの如き自我に等しき他人の存在とを信する「形而上學」が成立すべきことを信せんと欲するものである。

歴史的時間は加工を更に一步進めたものであつて、歴史的事件は極めて嚴密なる時間的關係に於て配列せられるのであるが、然し其は未だ物理的時間の如く量的なものではない。質的であり又非連続であつてジンメルが「歴史的形象は非連続的な、言はゞ中心的概念の廻りに凝集した部分的形象から成立する。我々の歴史の構成法はかゝる各の凝集點の周圍に互に區別し得る個々の過程の一群を集める。」^①等と言ふが如く一程度の、即ち歴史的個性を保持し得る丈の幅或は擴り（連続性）を有する時點の系列として成立するのである。かゝ

る「點的性質」（ジンメル^②）が歴史的認識の一つの特性を爲して居るのである。歴史の全過程を中斷なき一つの連続と考へるのは一つの見方一つの形而上學であるが、此場合に於ても其はまた一つの個性的者であり、點的性質を有するのである。之れに對して個々の歴史的事件は其の一つ一つが他から分離せられて時間上點的に配列せられる。即ち「眞の時間」或は「經驗」の有限性が（其の連続性と共に）其處に寫影せられて居るのである。勿論何れの事件も或る程度の擴り即ち連続性を有するのであり又何處に於て他から區別分離せられるかは任意であつて實際場合によつて種々に異なるのであるが、吾人は如何なる事件に對しても其の事件の中核の廻り或る程度の範圍をしか連続として認識し得ないのである。他の事件はまた別に其の中核を有して之れが先きの事件と繋ぎ合されるのである。而して此等の諸事件が一つの大きな連続的過

程をしなければならぬとするのは思惟が唯左様に考へるのであつて（即ち一つの理想、一つの形而上學であつて）實際の個々の事件の認識が左様であるのではないのである。従つて其は眞の意味に於ての歴史的認識とは稱し得られない或者である。夫故同じく歴史的時間と呼ぶものの内に於ても二種を區別すべきであつて、其の一は今述ぶる如く歴史の全過程を一つの純粹なる連續と考ふる場合の時間であつて、此場合に於ては個々の歴史的事件は後退して唯極めて不明瞭に認識せられるに過ぎないか或は場合によつては其の或ものは全然隠没して全く認識せられないのであつて、其の代りに其の全過程なるものが一つの事件として（従つて一つの連續として）認識或は思惟せられるのである。（ジンメルは此事を「出來事の形式を示すもの」として、其れのみが現實の相に正確に適應する所の連續的表象は實は具體的な歴史内容から離れ

抽象的に反省された思惟に過ぎず^③）と言つて居る）然しかくの如く全過程を考ふる場合の時間は最早個々の歴史的事件を認識せんがためのものではないのであるから、こは歴史的時間と言はんよりは寧ろ「形而上學」的時間と稱するがより適當ではないかと思はれるのである。宇宙論に於ても其處には最早個々の物理的認識は行はれてゐないのであつて、従つて其の時間は物理學的時間として、は無く「形而上學」的時間として成立するのである。其の第二は實際に個々の歴史的事件を認識せんとする場合の時間であつて、之れが前述の如く直觀（經驗）の有限性に基いて點的性質を有するのである。吾人が非連續であり時點の系列であると言ふのは此時間の事である。之れが眞の意味の歴史的時間である。（ジンメルに於ては此二種の時間の區別が未だ左程明瞭ではない様であるが、前記引照^③及び下記引照等に於て見る如く、其考への存する

ことは充分明かに認め得るであらうと思ふ。夫故歴史的認識は延長を有する統一的形象の構成と個々の現實的直觀との妥協の間に絶えず動搖する、——前者の連續性は出來事の形式を寫してはゐるが現實的直觀の個々のものによつて滿されてはゐない、後者は學的理想に於ては單に年代記上の一點を示すのみで、夫故に反つて現實の出來事の連續性から離れて了ふのである。④而してこの眞の意味の歴史的時間は個別的なる歴史的事件の前後の關係を明かにすることが目的なのであつて、物理學の時間の如く數量的關係を表はすことを目的とするものではないのである。其は恰も性質幾何學に於ける位置解析の如く數學的連續たるを要しないのである。唯前後の關係を(質的に)表しさえすれば良いのである。元より歴史に於ても事件の位置を定むるに物理的時間の語を用ふるのではあるが、然し其は物理學の用ふる眞の物理學的時間

とは甚だ意味性質を異にしてゐるのであつて、其の物理的時間は唯歴史的事件の前後を精密に規定表現するための便誼又は必要上用ひられるに過ぎないのである。物理學に於ける如く數量的關係を定めんが爲めのものではない。従つて其はヴェントの考ふる如く歴史的^⑤事件との間に何等^⑥數學的^⑦關係を爲すべきものではない。唯事件の前後を表すための一つの手段たるに過ぎないのである。歴史に於ては時間が問題なのでは無く、事件の前後的關係が問題なのであり、事件の位置付けが問題なのである。従つて歴史は必ずしも物理學的^⑧時間を用ひずとも成立し得るのであつて、原始の歴史(例へば日本の神代史の如き)は之れであると思ふ。又單に事件の位置を示すためとしてのみで無く、或る期間の長さを表すために物理學的^⑨時間の語を用ふることがあるのであるけれども、此場合に於ても「形而上學」的時間の場合と同様に何等量的意味

を有するのではないのである。たゞ質的意味に於て用ひられてゐるのである。夫故物理的時間の長さとは歴史的時間の長さとは必ずしも一致せず、物理的には極めて長い時間も歴史的には甚だ短い事があり（心理的時間の場合に於ける如く事件の少い場合には必ず然るのであつて、例へば有史以前或は暗黒時代の如きは之れである）、また物理的には甚だ短い時間間の事も歴史的には極めて長い事があり得るのである。此點に於ても歴史的時間は心理的時間の性質を多分に有してゐるのである。

- 註① Georg Simmel, Zur Philosophie der Kunst, Gustav Kiepenheuer Verlag, S. 163.
 ② Simmel, op. cit. S. 162.
 ③ Simmel, op. cit. S. 164.
 ④ Simmel, op. cit. S. 168.
 ⑤ Wundt, Logik, Bd. III, S. 404.

五

種々の時間の關係に就いて

時間が測定し得べき、數量的なる物理學的の時間となるためには空間（物理的空間）と關係せしめられることを要する。そは總て測定と言ふことは空間を待つて始めて可能となるからである。然しかく空間によつて測定せられる時間が眞の時間性から如何に遠ざかるものとなるかはベルグソン（意識の直接與件）の指摘によつても極めて明かである。（そは恰も重さの感覺、溫寒の感覺を衡秤の目盛、寒暖計の目盛を以て表さんとするが如きものである。）今日の相對性理論は物理學の時間を物理學的空間の一つの次元に歸着せしめてゐるのである。眞の時間は言ふ迄も無く本來空間とは獨立的なるものであるけれども、かく空間と關係付けられることによつて成立する物理學的時間は自ら「相對的」とならざるを得ないのである。（從つて「時空の相對性」と言ふことは唯此物理學的時間に就いてのみ言はるべき事なのであつて、其他の時

間殊に本源的なる時間の絶對性等には何等の關係をも有しないのである。フッセル〔内部時間意識の現象學講義〕、「イデー」等に於ては其の所謂現象學的時間と物理學的時間との關係が未だ充分明かにせられて居ないのであるが、ベルグソン〔意識の直接與件〕、ポアンカレ〔科學の價値〕、マッハ〔認識と誤謬〕等は所謂心理的時間から物理的時間を導くことが甚だ詳細である。然し心理的時間と本源的なる「眞の時間」との關係が前述の如くであるから、こは畢竟「眞の時間」と物理的時間との關係を定むるものに外ならぬと思はれるのである。物理的時間が如何にして構成さるゝかに就いては別に此處に考察するの必要もないことと思ふ。

以上吾人は質的及量的に種々に加工せられた時間に就いて考察し來つたのであるが、また同じく

加工せられた時間の内に於ても全く抽象的なるものと然らざるものとを分つ事が出来るかと思ふ。ベルグソンは物理的時間を氏の所謂「實時」に對して「抽象的時間」と呼ぶのであるが、吾人は同じ物理的時間の内に於ても實時（勿論「眞の時間」とい言ひ得ないのであるが、之れとの直接の關係を失つてゐないもの）と、全くの考へられたる抽象的時間とを區別しなければならぬと思ふ。例へば（ベルグソンの引例を用ふれば）今現に「砂糖の溶解」しつゝある時間を測りつゝあるが如き場合は之れを實時と稱しても大した不可はないであらうと考へられるのである。反之物理學の微分方程式の解法に於て顯はるゝ如き時間は全然考へられたもの即ち全然抽象的なるものと言はなければならぬであらう。こはベルグソンの指摘せる如く全く「同時」に於ける一種の關係に外ならぬのであつて、其は如何なる速さを以て展開すると見ても、少しも

差支ないのである。^②氏が極力眞の時間（氏の所謂「實時」）から區別せんとするものはかゝる時間であらうと思ふ。即ち實際に測りつゝある時間 dt は猶實時とも考へ得られるのであるが、方程式中の dt 或は t は全く考へられたる抽象的な時間であると思ふのである。而してこの抽象的な時間である t は直接なる微分的實時から導き出さるのである。（體系は要するに微分方程式の解法たるに過ぎない。地質學に於けるユニフォーミタリアニズムをも参照せよ。）

歴史的時間、「形而上學」的時間等に就いても全く同様に言ひ得るではないかと思はれるのである。以上吾人は種々の時間に就いて考察したのであるが、今之れを全體として概観するに、質的並に量的に加工せられた總ての時間は（形而上學的には種々に考へ得らるゝとしても）直接には（直接の

事實としては）皆一様に最基礎的な「眞の時間」の内にあり、其の上に浮んで之れと共に流れつゝあるのを見る。而して「眞の時間」は、此等總ての時間が之れから派生流出するにも不拘自らは毫も變化することが無い事は、恰もプロテノスの神が一切萬物を自己より流出せしめつゝ自らは毫も變動する所が無いのと同様である。

註① Bergson, *Time and Free Will*, p. 108.

② Bergson, *Creative Evolution*, p. 357.